

Barbara Mittler,

A Newspaper for China?: Power, Identity, and Change in Shanghai's News Media, 1872-1912

バルバラ・ミットラー著

『中国のための新聞?——上海新聞メディアの

「力」・アイデンティティ・変容(一八七二—一九二二年)』

片 柳 香 織

欧米や日本の中国史研究において「西洋中心主義」への批判が本格化したのは一九八〇年代からである。「西洋の衝撃」(ウエスタン・インパクト)が中心に据えられ、中国の主体性が軽視されていることを「知の帝国主義」であると断じたアメリカのポール・A・コーエンは、それに代わるものとして「中国自身に即したアプローチ」を提唱した。これは中国の内発的变化の重視や、地域社会への注目を意味するもので、以来アメリカでは地域史や都市研究の領域で優れた研究が相次いでいる。日本においても濱下武志の朝貢貿易論や溝口雄三の中国基体論などは、西洋中心主義史観を脱却した新たな中国像を築いたと言える。

しかし、西洋中心主義批判の行き過ぎは多方面から指摘される

ところである。本野英一は経済史の分野から、近代中国における西洋の重要性を確認し、近代中国像の再構成を試みている。この問題を考える上で、別の角度から示唆を与えるのが在華西洋人の存在である。イギリス帝国史の領域では、在華イギリス人に関する研究が以前からなされてきた。特に、上海に関するものは豊富で、「シャンハイランダー」と自称したイギリス人についての研究は二〇世紀初頭から現在に至るまで数多く見られる。しかし、多くのイギリス帝国史研究者はイギリス本国との関係を重視し、在華イギリス人を中国の「アウトサイダー」と位置付けた。他方、大陸の中国史研究においても、帝国主義支配を糾弾する、という立場からイギリス帝国史とは全く異なるものの、「敵」である在華西洋人を中国史の外に位置付けるという点は共通している。

在華西洋人が例外的に重要な役割を果たすのが中国新聞史研究の領域である。一九世紀以降、新聞業が在華西洋人の手に握られていたことから、西洋人による新聞業を「近代新聞業の祖」とするのは中国新聞史においても通説である。ハイドルベルク大学のルドルフ・G・ワグナーは、このことを中国史においても盛んになっていた公共圏論争と結びつけ、西洋中心主義批判への再検討の足掛かりとした。彼の同僚であるナターシャ・ヴィッティンホフ、アンドレア・ヤンク、そして本書の著者であるバルバラ・ミットラーがその研究を更に発展させ、今やハイドルベルクは中国新聞史研究の新たな拠点となっている。

ここで、本書の構成を紹介しておく。

序論 中国の公共圏と新聞の「力」

第一部 メディアの創出

第一章 中国化された外国メディア…中国における新聞の変容

第二章 聖賢の言葉の中に…中国語新聞の権威と様式

第三章 国家を公共の場に?…『京報』転載の影響と展望

第二部 メディアを読む

第四章 女性を女性化する…女性読者の構築

第五章 「多重人格」…『上海人』のイメージとその声

第六章 中国ナショナリズムの性格…上海の新聞を読む

—一九〇〇—一九二五年

結論 新聞の「力」——再考

序論では、本書の研究対象と課題を明らかにする。ハイデルベルク大学の他の研究者と同様、本書の中心となるのは上海の日刊紙『申報』（一八七二—一九四九年）である。イギリス人商人アーネスト・メイジャーによって創刊された『申報』は、廃刊までの八〇年近く、中国新聞業の中心に君臨し続けた。外国人が経営し、治外法権を有する租界の中で発展しながらも、中国知識人の支持を得たことや、中国公共圏の形成に重要な役割を果たしたことは、ワグネルらの研究の明らかにしてきたところである。それでは、どのようにして外国メディアである『申報』が「中国のための新聞」になっていったのか。本書の第一の課題はその「中国化」の過程を明らかにすることである。また、中国官憲や外国人が『申報』を始めとする新メディアの影響力を非常に警戒していたことが知られているが、新聞は本当に彼らが恐れたような革命運動や排外運動を煽動したのか。第二の課題はメディアと

「現実」（リアリティ）の対応関係を読み解き、メディアが持つ力の性格を明らかにすることである。

第一部は、外国メディアが「中国化」していくための様々な工夫について考察する。第一章は、『申報』の形式と文体に着目する。はじめに、近代中国新聞業の先駆けとなった西洋人宣教師の刊行物について言及する。宣教師達はキリスト教が中国の土壌に受け入れられるように、中国の語法や価値体系に従い、異文化性を弱めようと試みた。後続する『申報』などの商業紙もそれに倣い、メイジャーの言葉を借りれば、「中国文明を中国に売る」とを旨とした。中国風の書式や西暦と中国暦を併記した日付表記法などは、外観において中国的であるというアピールの表れである。また、新聞に特徴的な文体として「新文体」というものがよく知られているが、これは『申報』創刊から数十年後、戊戌変法期の梁啓超によって創られたものであるというのが一般的である。しかし、『申報』と梁の文体にはいくつかの類似点が見られる。まず、『申報』によって初めて導入された社説において、科挙の答案に用いられる八股文とよく似た構成が見られる。八股文の煩雑さもたらず弊害は、『申報』においてもしばしば論じられたにも関わらず、八股調の社説は引き継がれ、梁啓超も同様の文体を用いている。更に、『論』『説』『記』など古典に由来する標題、古代の聖賢の言葉の引用など「伝統への執着」が見られる。また、客観性を重んじる西洋の新聞とは異なり、一人称や感嘆詞を多用し主観性に訴えることや、「志怪」や「伝奇」といった伝統的通俗文学の要素を娯楽記事のみならずニュース記事にも取り入れた点も、特徴的である。このような点から、筆者は中国のジャーナ

リズムを「文学的ジャーナリズム」であると捉えている。「新文体」は伝統的な形式に近代的な内容を盛り込んだ点が特徴であるが、ここではそれを梁啓超の独創ではなく、「申報」など外国メディアが中国化していく過程で形成されたものとし、梁啓超はその比類無い才能によってそれを完成の域まで高めただけであると考えられている。

第二章では「伝統への執着」の一つとして、聖賢の言葉の引用が持つ意味について考慮する。始めに、中華民国建国と孫文の大總統就任に対する『申報』の祝辞が紹介される。これは革命の成功と共和国樹立を讃えるものでありながら、『孟子』『論語』『詩経』など、おおよそ新時代の幕開けとしては不似合いなほど多くの古典の引用が見られ、大總統は古代の賢王になぞらえられる。これを見る限り、「新文体」の発展は「古雅」から「今俗」への移行である、という中国新聞史の捉え方には疑問を持たざるを得ない。そこで、「古雅」である聖賢の言葉が、新聞にどのような効果をもたらしたのかを、「貿易」と「教育」に関する『申報』の記事から読み解く。開国による商業秩序の変化は、多くの人々の関心を貿易へと向けた。しかし、「君子は義に喩り、小人は利に喩る」という『論語』の言葉が物語る通り、貿易には常にマイナスイメージが付きまわった。『申報』の記事ではこのマイナスイメージを払拭するために、他の記事には見られないほど多くの古典が引用され、貿易の正統性を古典によって裏付けようとしている。一方、教育に関する記事を見ると、西洋式の新教育の導入に関しては聖賢の言葉による正統化を行っているものの、貿易に比べるとその量は遙かに少ないと言える。つまり、聖賢の言

葉は貿易や共和制のように旧来の価値観を覆す際に必要とされ、教育のように伝統的な価値観と合致するものに関してはあまり必要とされなかったのである。このように、聖賢の言葉は『申報』の中で、新たな概念に正統性と權威を与え、変化を容易にする働きをしていたと筆者は見ている。

第三章では『申報』などの新メディアと旧来の官報の相互関係について考察する。漢代以降、中国には官報が存在しており、清代には『京報』という名称で刊行されていた。『京報』は勅令、奏上、朝廷内の行事や人事異動などを掲載し、「報房」と呼ばれる民間出版社によって印刷されていた。価格や体裁は報房によって異なっていたが内容は同一で、同時代の英字新聞では「退屈な新聞」と否定的な評価がなされている。『申報』においても『京報』の報道範囲の狭さを批判する記事が多く見られるが、それに関わらず創刊から清朝滅亡によって『京報』が消滅するまで、欠かさず転載を続けた。その理由としては、『京報』の読者である士大夫層を『申報』読者として取り込むこと、初期においては紙面を埋めること、そして『京報』の持つ朝廷由来の權威を『申報』に与えることなどが挙げられている。電信を用いたネットワークにより、『申報』は『京報』をより迅速に、より安価に提供する近代的報房となっていた。『国家の声』である『京報』が商業紙の記事の一部として扱われたことは、『京報』を商業化し、その權威を落とすことにつながった。しかし同時に、『京報』自体は何ら変わることなく、「朝廷周辺に限られたもの」から「全国の民衆に向けられたもの」へとその性格を変えたと言うことができる。一九世紀半ば以降、「半官報」と呼ばれる半官半

民の新聞の創刊が相次いだ。これらは新メディアの商業性・実用性を付加した官報であった。『京報』転載は新メディアに『京報』的な権威や形式を与えたのみならず、官報にスピードや商業性・普遍性といった新たな価値観を要求し、その改革を促したというのが筆者の主張である。

第二部では、具体的な記事から、メディアが様々な「現実」をどの程度まで反映し、影響を及ぼしていたのかを考察する。第四章では『申報』の女性に関する記事や広告を取り上げる。『申報』を始め、多くの新メディアにおいては階級を超えてあらゆる人々が読むことができるということが謳い文句となっていたが、そこに必ずしも女性が含まれない。一九世紀末になるといくらかの「女性向け」の雑誌や記事も用意されるようになったが、それは一部の例外を除き、女性を「国民の母」として位置付け、家政と育児を女性の領域として再確認するものが大半であったことがわかる。次に『申報』の広告記事の分析を通して、女性を特に対象としたものは美容や育児に関するもので、書籍や機械の広告は専ら男性に向けられていた。これら「女性に対する」記事や広告はジェンダーの区分を明確にし、旧来の女性の領域を再確認し、女性解放運動に歯止めをかけた。

しかし、「女性について」の記事は異なる様相を呈していた。例えば、女性の地位の低さが西洋諸国から中国の「後進性」と捉えられる中、女子教育は救国の万能薬として語られ、男性と対等に活躍する「新女性」の養成を急務とした。このような記事の関心は女性ではなく国家の命運にあり、想定される読者は女性だけでなく男女の「ナショナリスト」であった。一方、「新女性」

と対極に位置する「伝統女性」として下層階級の女性、特に娼婦の悲惨な境遇もしばしば記事の中に見られた。「新女性」が近代化のシンボルであれば、彼女たちは虐げられる中国のメタファーとして表される。つまり、「女性について」の記事は女性解放のためではなく、救国のために語られた。それは、「女性に対して」の記事で国民の母たるべくその領域が制限されたことも密接に関連する。従って、女性にはナショナリズムとの関連で両義的な評価が与えられ、実際の女性解放運動にメディアが果たした役割は主要なものではなかった。また、女性についての記事は物語的・教訓的であり必ずしも女性の現実を反映したものではなかったと見ている。

第五章では新聞上に表れる「上海人」のイメージについて扱う。前章の女性に関する記事にも様々な女性像が見られたが、上海に関する記述はそれ以上に多様で混乱している。清末、その独自性と重要性を示すかのように、上海の新聞上には上海に住む中国人に対して「上海人」という呼称が現れる。その殆どが開港以降の移民であるが、彼らは美しい夢と醜い現実の間に暮らす分裂症の人間として描かれる。『申報』の記事の中で上海は常に両義的に捉えられた。娼婦を通して語られる官能の魅力と退廃への危惧、西洋の機械を通して語られる文明への賞賛と追従への警告。外国人の存在も上海に文明をもたらしたものであると同時に、上海を治外法権の下に抑圧するものでもある。そのような状況で「上海人」のアイデンティティは分断される。ある時は西洋文化を強力に鼓吹し、またある時には西洋に追従することを痛烈に非難する。「上海人」の記述の特徴は自らが「上海人」であることを隠し、

第三者を装って上海や「上海人」を描くことに求められる。これは、彼らが「上海人」であることに自己嫌悪と罪悪感を持ちながらも、「上海人」を描くことを一つの使命と考えていたからである。すなわち、分裂した「上海人」は未来の中国にとつてのモデルであると同時に警告であり、予言者のような存在として表象されている。西洋と東洋のはざまでジレンマに苦しむ「上海人」はその声を上海ではなく、「中国」へと向ける。「近代化」の実験台である上海からの分裂した声は、「予言」の形で中国という単一の存在への訴えとなったと考えられている。

第六章では、『申報』に見られるナショナリズムと「路上の現実」としてのナショナリズムがどのような関係にあったのかを明らかにする。中国のナショナリズムは本質的に排外的なものと捉えられており、それを煽動したのが『申報』などの中国語新聞であるとするのが一般的である。しかし、本章ではナショナリズムが高まりを見せた時期の『申報』の記事を取り上げ、その見解に異を唱える。具体的には一九〇〇年の義和団事件、〇五年の反米ボイコット、一年の辛亥革命、一九年の五四運動、二五年の五・三〇事件が挙げられている。これらは、辛亥革命を除けば排外・反帝国主義運動の極みとして捉えられている事件である。しかし、『申報』の記事に見られるのは排外運動の扇動ではなく、むしろ排外主義がもたらした悪しき結果としての中国の苦境を嘆く姿である。例えば、義和団事件を政府の排外政策の結末であると非難し、列強を支持している。また、反米ボイコットに対しては冷静な態度で臨み、アメリカの新聞における反中プロパガンダよりは穏健なものであったという。上海で起こった血の惨劇、

五・三〇事件においてすら、露骨な排外アジェンションは見られない。むしろ、『申報』の記事はあらゆる意味で外国人よりも中国人に注意が向けられている。アメリカでの中国人の境遇、五・三〇事件で死んだ学生への哀悼といった同情的なものもあるが、五四運動における政府批判、五・三〇事件で死んだ学生よりも犬の死を嘆く中国人への冷笑など、批判的なものがより多く見られる。「路上の」現実としてのナショナリズムが排外主義という形で爆発し、英字新聞は中国語新聞の排外プロパガンダを危惧したにも関わらず、『申報』のナショナリズムは中国の現状に対する義憤に止まったと筆者は捉えている。

最後に、著者は新メディアの性質を振り返り、出版業の力がどこに求められるかを再考し、結論とする。外国メディアを「中国化」する上での伝統要素の重要性、メディアの現実と路上の現実の乖離を明らかにした著者は本書をこうした研究の最初のステップとして位置付ける。そして、次なる課題として、実際はどのような人が読者（本書中で言及された想定上の読者ではなく実際の読者）であり、何故それを読んだのか、また読んだことによつてどのような行動を取ったのか、などが問題になる。『申報』が反映したのは路上で見られる現実ではなく、近代中国人の混乱した精神的現実であったという考察から、新聞の持つ力は具体的なものではなく、新聞の持つ影響力への信念という想像上のものであったのではないか、という暫定的な結論により、本書は結ばれる。

本書は『申報』という一つのメディアを扱った研究でありながら、その提起する問題はメディア史の領域には止まらない。『申

報」を中国新聞史の枠組みから解放し、国際関係や公共圏という視点の中で捉え直したワグナーらの姿勢は本書にも受け継がれているが、本書には彼らの研究とは異なる手法が見られる。それは『申報』をコンテキストではなくテキストとして読むというものである。イギリス外務省文書や数多の中国語史料を駆使して『申報』の人的・物的ネットワークやそれを巡る軋轢を明らかにしたワグナーらとは対照的に、著者は史料の大半を『申報』に依拠している。このことは何よりも、史料としての『申報』の持つ可能性の豊かさを改めて感じさせてくれる。本書で紹介された興味深い記事の数々は『女性史』『上海史』といった既存の枠組みに対して新たな視点を提供することになるであろう。例えば、『女性に対する』記事と『女性について』の記事の違いという視角は非常に興味深いものである。但し、女子教育と並び『申報』でも頻繁に議論された纏足についての考察が欠如していることは惜しまれる点である。また、『上海人』という切り口は魅力的であるが、本書でも若干言及された在華イギリス人「シャンハイランダー」との関連の中で更なる深みを増すかもしれない。本書では、上海よりも「中国のため」に発し、ナシヨナリズムを形成していく上海人の声に焦点が当てられたが、同じ時期に、『シャンハイランダー』は「上海人」に対して連帯を呼びかけ、『外敵』である中国政府からの防衛を試みている。これに対する「上海人」の反応を『申報』から読み解くことができれば、ナシヨナリズムの捉え方にも何らかの変化が見られるかもしれない。

本書の大きな成果の一つとして挙げられるのは、形式が持つ力の発見である。従来、『申報』など新聞の記事を扱う際には内容

が重視され、その形式にはあまり注意が払われなかった。しかし、本書の考察から、伝統的な文体や書式などが、外来のものであった新聞を「中国化」するために重要な役割を果たしていたことがわかる。このことは「中国近代化論」の核心とも言うべき、「伝統と近代」についての新たなモデルを提示している。「伝統」の捉え方は「西洋の衝撃」の捉え方と表裏一体の関係をなす。マルクス主義史観や「西洋中心主義史観」においては、前近代と近代は「西洋の衝撃」によって断絶しており、「封建制の軔」である「伝統」を振り払い、西洋化していくことが中国の「近代化」であった。一方、西洋中心主義批判の立場では、「伝統」と「近代」の連続性が重視され、極端な場合、西洋の影響は周辺に追いやられてしまっている。しかし、本書において、『申報』が「中国化」していく過程を見てみると、『伝統』と『近代』が対等に相互的に作用している。「新文体」の考察を通しては、「伝統を脱し」「西洋帝国主義に敢然と立ち向かった」梁啓超を中国近代化の立て役者とする中国新聞史の通説に意義を唱え、「中国の伝統に執着する西洋メディア」を主役として登場させた。また、聖賢の言葉は近代化を妨げるものではなく、むしろそれを促進するものとして捉えられている。『京報』の考察は、「伝統から近代へ」力だけではなく、「近代から伝統へ」の力が働いていたことを示唆する。つまり、本書では「伝統と近代」を「近代化の妨害」や「伝統の克服」という形ではなく、伝統と近代のポリフォニーとして捉えるというモデルを提示しているのである。

このようなモデルの提示は『申報』をテキストとして読み、その形式を詳細に検討したからこそ為し得たものであると言える。

しかし、これは同時に、新聞を「テキストとして読む」ことの限界をも示している。読者への影響力を測ることなど、残された課題は、恐らく「申報」をテキストとして読む」ことで克服することは困難であろう。むしろ、先行するワグナーやヴィッティンホフらの『申報』研究がそのコンテクストを明らかにしてきたから成り立った研究であるとも言える。それらを読まずに本書を手にした読者にとって、コンテクストに対するテキストの持つ意味を明確に感じられるかどうかは、疑問の残るところである。

はからずも本書は、一つの新聞を「テキストとして読む」ことの困難さとその限界をも示すことにもなっているが、読み解かれた内容の豊かさはそうした欠点を補ってなお余りあるものである。本書の原案が教授資格申請論文としてハイデルベルク大学に提出された際、*A Western Medium Creating Chinese Identity? Metamorphoses of the Newspaper in Shanghai (1872-1912)* (『中国人アイデンティティを形成する西洋メディア?』)という標題が付けられていたことから明らかなように、西洋中心主義批判への再検討を一つの課題としている。在華西洋人の経営する新聞が伝統要素を取り込み、「女性」や「上海人」を通して中国を表象していったことは、従来の「西学東漸」研究には不在であった在華西洋人を、その中心的な位置に据え直すということになる。勿論、新聞の影響力やアイデンティティ形成との関係については更なる研究を必要とするが、本書はそのための布石を打ったと言えよう。

異文化受容のあり方からメディアの捉え方まで、深みと広がりを持つ本書に想定される読者は、中国史やメディア史の研究者に限定されないはずである。多くの人に本書から史料の持つ豊かな可能性を感じてもらえるよう祈りつつ、筆を擱く。

① Paul A. Cohen, *Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past*, New York, 1984 (佐藤慎一訳『知の帝国主義——オリエンタリズムと中国像——』平凡社、一九八八年)。

② 濱下武志『近代中国の国際的契機』東京大学出版会、一九九〇年。

③ 溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会、一九八九年。

④ 本野英一『伝統中国商業秩序の崩壊——不平等条約体制と「英語を話す中国人」——』名古屋大学出版会、二〇〇四年。

⑤ 近年のものは Robert Bickers, *Britain in China Community, Culture and Colonialism 1900-1949*, Manchester, 1999。

⑥ 方漢奇編『中国新聞事業通史第一巻』中国人民大学出版社、一九九一年。

⑦ Rudolf G. Wagner, 'The Role of the Foreign Community in the Chinese Public Sphere', *China Quarterly* 142, 1995。

⑧ Natascha Vittinghoff, *Die Anfänge des Journalismus in China (1860-1911)*, Wiesbaden, 2002。

⑨ Andrea Janku, 'Der Leitartikel in der Frühen Chinesischen Presse Aspekte Kultureller Interaktion auf der Ebene des Genres', in: Dietmar Rothemann ed., *Anegung und Selbstbehauptung*, München, 1999。

(Harvard University Press, Cambridge, Mass., 2004, pp. ix+504)

(京都大学大学院文学研究科修士課程)